



NFC所蔵作品選集

MoMAK FILMS

2016.04—07

NFC所蔵作品選集

MoMAK FILMS

information

上映時間 | 各回14:00-18:00頃 (開場は13:30)

*7月15日(金)のみ18:00-上映

上映作品は予告なく変更する場合があります。

上映作品、各回のスケジュールについては京都国立近代美術館HPにてご確認ください。

www.momak.go.jp/films/

料金 | 1プログラム 520円 (当日券のみ)

*本券でコレクション展もご覧いただけます。

会場 | 京都国立近代美術館 1階講堂

先着100席

入場券は会場入口にて販売します。

当日13:30(7月15日のみ17:30)より当日分のすべての作品の整理番号つき入場券を販売、開場します。各回入替制です。2回目は上映開始の10分前に開場します。会場内での飲食はご遠慮ください。

主催 | 京都国立近代美術館(MoMAK)

東京国立近代美術館フィルムセンター(NFC)



企画協力 | 北小路隆志 (映画評論家 / 京都造形芸術大学准教授)

板倉史明 (神戸大学大学院准教授)

Exhibition

同時開催中の展覧会

オーダーメイド:それぞれの展覧会

会期 | 2016年4月2日(土) - 5月22日(日)

キューバの映画ポスター 竹尾ポスターコレクションより

会期 | 2016年6月1日(水) - 7月24日(日)

ポール・スミス展

HELLO, MY NAME IS PAUL SMITH

会期 | 2016年6月4日(土) - 7月18日(月・祝)



必殺仕掛人

2016 ⁰⁴ April ⁰⁷ July

access

京都国立近代美術館

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町

TEL | 075 761 4111

www.momak.go.jp



・JR・近鉄京都駅前(A1のりば)からバス5番 岩倉行

「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ

・JR・近鉄京都駅前(D1のりば)からバス100番(急行)銀閣寺行

「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ

・阪急烏丸駅・河原町駅、京阪三条駅からバス5番 岩倉行

「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ

・阪急烏丸駅・河原町駅、京阪祇園四条駅からバス46番 平安神宮行

「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ

・市バス他系統「東山二条・岡崎公園口」または

「岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前」下車徒歩約5分

・地下鉄東西線「東山」駅下車徒歩約10分

MoMAK F Column

いち, への, 「第三映画」

キューバ映画と言われても、日本では馴染みのない方が大半でしょう。1972年に日本初の「キューバ映画祭」が行われ、1980年代後半には劇場公開も実現しましたが、上映の機会は決して多くありません。ただ、過去のフィルムが配給会社の好意でフィルムセンターに寄贈されたおかげで、いくつかの代表作は今でも日本で観られます。

キューバ映画の特質を理解するには、一本の補助線を引いてみるのが有効でしょう。それは「第三映画」という概念です。1960年代後半にアルゼンチンの監督フェルナンド・ソラナスらによって提唱された語で、以降のラテンアメリカ映画の一傾向を象徴するものとなりました。「第三」と言うからには第一と第二の映画があるわけですが、第一というのは煎じ詰めればアメリカ映画です。つまり、娯楽性の追求を通じて世界市場を制覇した一大映画産業を示します。そして第二は、映画を芸術作品と見なしてその価値を高めようとするヨーロッパ映画です。これら二つの理念形を乗り越えて、帝国主義に抵抗し、世界を変革するための直接行動的な映画として模索されたのが「第三映画」です。この理念は、のちにブラジルやチ

リ、アルゼンチンなどで軍事政権が生まれ、自由な映画作りが阻まれた事実を考えると説得力あるマニフェストだったと言えます。

すでに革命を成功させたキューバの映画界は、当然ながらこのマニフェストに近い位置に立っていました。しかしキューバの映画状況は、この言葉だけで説明するにはあまりにも豊かすぎます。まず、革命前は経済的にアメリカの操り人形だったこの国では、圧倒的な数のアメリカ映画が注ぎ込まれていました。その時代の映画館の雰囲気は、亡命した作家ギレルモ・カブレラ・インファンテが「亡き王子のためのハバーナ」という小説の中で懐古的に描いています。鋭い映画評論も書いた彼は、アメリカ映画を愛しすぎて、アメリカと断交した革命キューバに耐えられず去ったといっても過言ではありません。

そして、1950年代のハバナの知的な学生たちはアメリカ映画に飽き足らず、ヨーロッパの映画芸術に触れようと上映組織を結成し、その真摯さはパリからフィルムを取り寄せるほどでした。若者の中には、後の巨匠監督トマス・グティエレス・アレアのようにイタリアの国立映画実験センターに留学する者まで現れます。つまり革命後のハバナは「映画の境界から新しい映画を興す」どころか、第一の映画も第二の映画も知り尽くした上で「第三映画」革命も担ってしまうという贅沢極まりない都市になっていたのです。

実際に作られたアレアの作品を観ると、その映画の教養の深さに驚かされます。『天国の晩餐』などはスペイン語圏映画の大先輩ルイス・ブニエルのブラックな作風をさらに黒く塗りたくり、また『ある官僚の死』という映画では、冒頭でブニエルやら黒澤明やら世界の名監督への謝辞が捧げられています。ウンベルト・ソラスの『ルシア』も、その荒削りな演出と作曲家レオ・ブローウェルのエレガントな資質の見事なマッチングに注目せざるを得ません。これはもう、独自のワイルドさを加えた「第二映画」そのものです。

革命キューバの「第三映画」性は、むしろドキュメンタリーやニュース映画に求めるべきでしょう。映画作りの経験のないサンチャゴ・アルバレスがこの部門の責任者となり、天才的な編集能力で、その瞬間の政治情勢や社会問題を瞬時に作品化しました。その「緊急映画」の思想と飛び抜けた生産性の高さは、ドキュメンタリー映画の概念を塗り替えるほどの衝撃となります。

映画国家としてのキューバの豊穡さを、私たちはまだ味わい尽くしたとは言えません。経済難の長引く現在は外国との合作に活路を見出し、これからはアメリカとの映画交流も広がるでしょう。しかし、オリジナリティに満ちたその遺産にこそ、新たに熱い視線を向けるべきでしょう。

岡田秀則 (東京国立近代美術館フィルムセンター主任研究員)